

大学生における運動系と文化系の部活動・サークル 適応感尺度の開発

須崎, 康臣
九州大学大学院人間環境学研究院

杉山, 佳生
九州大学大学院人間環境学研究院

斉藤, 篤司
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/1800864>

出版情報 : 健康科学. 39, pp.89-95, 2017-03-24. 九州大学健康科学編集委員会
バージョン :
権利関係 :

—原 著—

大学生における運動系と文化系の 部活動・サークル適応感尺度の開発

須崎康臣¹⁾, 杉山佳生¹⁾, 斉藤篤司^{1)*}

A study on the development of the Club Adaptation Scale for athlete and non-athlete university students

Yasuo SUSAKI¹⁾, Yoshio SUGIYAMA¹⁾, and Atsushi SAITO^{1)*}

Abstract

The purpose of this study was to develop the Club Adaptation Scale in University Students (CASUS) who participated in extracurricular activities. Participants were 1,047 (969 male, 277 female; 18.63±1.00 year), comprising 650 athletes and 397 non-athletes, who completed a questionnaire including measures of CASUS, current adjustment and value of clubs in school life. Exploratory factor analysis revealed that CASUS was constructed of 3 factors: commitment, maladjustment, and satisfaction of club/ membership. Confirmatory factor analysis indicated goodness of fit indices for 3 factor structures of CASUS in the athletic club and non-athletic club. All subscales of the CASUS showed sufficient reliability and concurrent validity in both clubs. The results of a t-test indicated a significant mean difference between the athletic club and non-athletic club for CASUS, but effect sizes of d were very small. Multiple regression analysis was conducted to examine the relationships among CASUS, active frequency and active time. The results showed that active frequency and active time were positively related to commitment and satisfaction of club/ membership in the athletic club. In the non-athletic club, active frequency and active time were positively related to commitment, and active time was positively related to satisfaction of club/ membership.

Key words: commitment, active time, active frequency

(Journal of Health Science, Kyushu University, 39: 89-95, 2017)

1 九州大学大学院人間環境学研究院, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University, Kasuga, Japan.

*連絡先: 九州大学大学院人間環境学研究院 〒816-8580 福岡県春日市春日公園 6-1 Tel & Fax : 092-583-7854

*Correspondence to: Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University, 6-1 Kasuga-koen, Kasuga City, 816-8580, Japan.

Tel & Fax: +81-92-583-7854 E-mail: saito@ihs.kyushu-u.ac.jp

はじめに

部活動・サークルは、そこでの活動への取り組みや、その取り組みを通して様々な人との交流が育まれるといったことを経験することができる。そして、このような経験を得られる部活動・サークルは、充実した学校生活と関連することが報告されている。須崎・杉山¹⁾は、運動系の部活動・サークル(以下、「運動系」と略す)、文化系の部活動・サークル(以下、「文化系」と略す)と複数の部活動・サークルに所属している大学生は無所属の大学生に比べて、居心地の良さの感覚、課題・目的の存在、被信頼・受容感が有意に高いことを明らかにし、学校生活の充実との関わりを裏付けている。また、大学生ではないが、中学生と高校生において部活動への参加は、自律欲求を充足する機会を提供し²⁾、親密な人間関係の構築が学校不適應の予防³⁾や自我の発達・成熟に寄与すること⁴⁾が指摘されている。さらに、大学生にとって部活動・サークルは友人との知り合うきっかけの場となり⁵⁾、大学生は重要な場所の1つとして捉えていること⁶⁾が報告されている。このように、部活動・サークルの参加は、充実した学校生活や学校に対する適応感に肯定的な影響を及ぼすことが考えられる。そのため、大学生において、部活動・サークルと学校生活との関係について検討しておくことは、学校生活における部活動・サークルの意義を明らかにするための重要な資料となる。

これまで学校生活と部活動との関係について検討した研究⁷⁾では、部活動適応感が用いられている。桂・中込⁸⁾は部活動適応感を、「部員個人が、部生活において自己を良好な適応の状態にあると意識していること、あるいは、その状態に近い将来獲得する可能性を認めていること」と定義している。本研究においても、この定義に準拠することとする。

しかし、部活動適応感を測定する尺度の多くは、運動系⁸⁻¹¹⁾と文化系^{12,13)}を別々に作成されている。それらを含めた測定尺度として中学生を対象とした渡辺・大重³⁾の尺度があるが、この尺度は、所属別での因子構造や信頼性の検討は行なわれていない。そのため、運動系だけではなく、文化系を含めた部活動・サークル適応感尺度を作成することは、それぞれが有す

る効果や特徴の違いについて明確にすることができると考えられる。また、部活動・サークル適応感を用いることで、部活動・サークルに参加の有無といった解釈から、所属する学生の心理状態を考慮することができる。そして、所属する学生の心理状態を考慮することによって、部活動・サークルが学校生活への充実感に及ぼす影響についてより詳細に検討することができ、大学生生活における部活動・サークルの意義を明らかにするための手掛かりとなりうる。

ところで、部活動・サークル適応感を高めるには、活動への関わり方が重要になると考えられる。なぜなら、大学生が所属する部活動・サークルの活動に参加することで、楽しさや満足感を味わうことができ、その積み重ねが活動に対する積極性を高めることが考えられる。また、部活動・サークルに参加する経験が多いほど、所属する人との交流する機会も増え、良好な対人関係の構築につながることを推察される。しかしながら、大学生を対象に活動頻度や時間が部活動・サークル適応感に及ぼす影響について検討されていない。

以上のことから、本研究では、大学における運動系と文化系の部活動・サークル適応感尺度を作成し、活動頻度と活動時間が部活動・サークル適応感に及ぼす影響について検討することを目的とする。

方法

1. 調査対象者および調査時期

大学でのスポーツ・運動関連科目の授業を受講した大学生を対象に6月下旬に調査を行った。調査の同意を得られ、欠損が無く、部活動・サークルに所属している1047名(男性969名、女性277名、性別不明1名; 18.63±1.00歳)を分析対象とした。その内訳としては、運動系は650名、文化系は397名であった。運動系の活動種目は、野球、サッカー、陸上競技、バスケットボール、バドミントン、アメリカンフットボール、ラクロス等であり、文化系の活動内容は、英語研究会、生物研究会、混声合唱、軽音、ボランティア、オーケストラ等であった。

2. 調査項目

2-1. 部活動・サークル適応感尺度

部活動・サークル適応感を構成するカテゴリーとして、先行研究から「活動への積極性」、「組織への満足」、「成員への満足」、「不適応傾向」を想定した。これらのカテゴリーの項目は、運動系と文化系に関する先行研究^{3,4,14,15)}から収集した。収集した項目は、部活動・サークルに文言を修正し、各5項目の計20項目からなる尺度を作成した。回答は、1「全くあてはまらない」から4「よくあてはまる」の4件法で求めた。

2-2. 部活動・サークルへの総括的適応感

桂・中込⁸⁾は、運動部活動における部活動適応感を測定するための尺度を作成しており、その中に総括的適応感を測定するため項目がある。総括的適応感は、現在と将来の総括的適応感の内容から構成されている。本調査では現在の総括的適応感を問う項目「今の部活動・サークルに入ってから、これまでの私の部活動・サークルでの生活は、全体としてうまくいっている」を用いた。回答は、1「全くあてはまらない」から4「よくあてはまる」の4件法で求めた。得点が高いほど、部活動・サークルにおける総括的適応感が高いことを意味する。

2-3. 部活動・サークルに対する価値観

部活動・サークルに対する価値観を測定するために、岡田¹⁶⁾が作成した学校生活の諸領域に対する重要度認知尺度を用いた。これは、学校生活における各領域の重要度を測定するための尺度であり、「(例; 友人)は自分の学校生活に重要だと思う」の内容で構成されている。本研究では、部活動・サークルに対する価値観を測定するために、「部活動・サークルは自分の学校生活に重要だと思う」の1項目を作成した。項目の回答には、1「ぜんぜんそう思わない」から4「とてもそう思う」で回答を求めた。得点が高いほど、学校生活で部活動・サークルを重要と捉えていることを意味する。

2-4. 部活動・サークルでの活動頻度・時間

部活動・サークルでの活動頻度とその時間を評価するために、活動頻度は、1「週1回」から7「毎日」の7

つの選択肢から回答を求めた。活動時間は、1日の活動時間に対して1「1時間未満」、2「1-2時間」、3「2-3時間」、4「3-4時間」、5「5時間以上」の選択肢から回答を求めた。

3. 手続き

調査は、授業時に集合法で行った。調査に際して、調査の目的、個人情報守秘の誓約、回答は任意であることを文章と口頭にて説明を行い、合意が得られた者から回答を得た。なお、本調査は九州大学大学院人間環境学研究院健康・スポーツ科学講座倫理委員会の承認を得て、実施された。

4. 統計処理

作成した適応感尺度の因子構造を探索的に確認するために、探索的因子分析(重み付き最小二乗法の直接オブリミン法)を行った。探索的因子分析では、固有値1.0以上を基準として因子数を抽出した。また、因子負荷量が.40未満の項目と2つ以上の因子が1つの項目に対して.35以上の因子負荷量を示した項目の削除を行った。また、抽出された因子構造のデータに対する当てはまりの良さを確認するために検証的因子分析を行った。そして、この因子構造が運動系と文化系において妥当であるか検討するために、それぞれで検証的因子分析を行った。この分析における適合度指標として、CFI、GFI、RMSEAを用いた。CFIとGFIは.900以上とし、RMSEAは.080以下を基準とした。なお、モデルの修正には、修正指数を参考にし、項目間の相関関係が想定される場合に、共分散を仮定した。その際、上述した適合度指標に加えてAICを用いた。AICはモデル間のデータに対する当てはまりの良さを示すものであり、値が低いほど良いモデルを意味する。これらの分析後に尺度の信頼性と妥当性を検証した。信頼性は α 係数を算出し、妥当性は部活動・サークルの総括的適応感とその価値観からの基準関連妥当性から検討した。

次に、運動系と文化系で部活動・サークル適応感の得点に違いがあるかを検討するために、 t 検定を行った。さらに、活動頻度と活動時間が部活動・サークル適応

感に及ぼす影響を検討するために重回帰分析(強制投入法)を用いた。これらの分析結果では、効果量を算出し、効果量の基準は水本・竹内¹⁷⁾に基づいた。 d の基準は、小を.20以上、中を.50以上、大を.80以上とし、決定係数である R^2 は小を.02以上、中を.13以上、大を.26以上とした。なお、有意水準は5%未満とした。分析ソフトは、SPSS(Ver19.0)とAmos(Ver19.0)を使用した。

結果および考察

部活動・サークル適応感尺度の因子構造を検討するために、探索的因子分析を行った。その結果、3因子が抽出された。因子1は『部活動・サークルのない大学生活は考えられない』、『辛い練習でも自分に役立ちそうであれば積極的に練習している』といった項目から構成されており、「活動への積極性」と命名した。因子2は『厳しい練習についていけない』、『部活動・サークル(行っている内容、種目)は自分に向いていない』といった項目から構成されており、「不適応傾向」と命名した。因子3は『部活動・サークルでは部員みんなを信頼している』、『部活動・サークルの仲間に満足している』といった項目から構成されており、「組織・成員への満足」と命名した。このうち、想定したカテゴリーの組織への満足と成員への満足が同じ因子として抽出された。これは、部活動・サークルに在籍する成員への満足することが、その組織への満足として認識されることを示唆している。

探索的因子分析で抽出された因子構造を検証するために、検証的因子分析を行った。その結果、GFI=.900, CFI=.899, RMSEA=.078を示していた。GFIとRMSEAは基準の満たす値を示していたが、CFIは基準を下回る値を示していた。この時の潜在変数から観測変数への影響指数(標準化偏回帰係数 β)は $\beta=.57-.83$ の値を示していた。そのため、修正指数を参考にして、項目間で共分散を仮定して、モデルの修正を行った。修正指数は『部活動・サークルのない大学生活は考えられない』と『部活動・サークルは自分の生活にとってなくてはならない』との項目間と『誰よりも上手になろうと努力している』と『活動以外の時でも、今やっている部活動・サークルのことを考えることがよくある』との共分散を仮定することを示していた。挙げら

れた項目内容を確認し、項目間で共分散を仮定できると判断し、共分散を仮定して検証的因子分析を行った。その結果、GFI=.922, CFI=.925, RMSEA=.068を示しており、全ての適合度指標で基準を満たす値を示していた。また、修正後のAIC=843.071は、修正前のAIC=1054.522よりも低くなり、修正後の結果がデータに適合していることが示された。この時の影響指数は、 $\beta=.57-.79$ を示していた。この修正後のモデルを用いて、運動系と文化系での適合度指標を求めた。その結果、運動系はGFI=.913, CFI=.925, RMSEA=.069を示し、影響指数は $\beta=.52-.78$ であった。文化系はGFI=.894, CFI=.903, RMSEA=.077で、影響指数は $\beta=.53-.79$ を示していた。文化系のGFIは基準を満たしていなかったが、基準に近い値を示し、他の適合度指標は基準を満たす値を示していた。これらのことから、運動系と文化系において、探索的因子分析によって抽出された因子構造は、データに対する当てはまりが良いことが推察される。これらの適合度指標の結果は、表2に示した。

作成した尺度の信頼性を検討するために、クロンバックの α 係数を算出した。その結果、活動への積極性は $\alpha=.87$ 、不適応傾向は $\alpha=.81$ 、組織・成員への満足は $\alpha=.85$ を示していた。運動系と文化系でそれぞれ α 係数を算出したところ、全体と同様の値を示していた(表3)。このことから、尺度は概ね満足のできる信頼性を有していることが考えられる。

作成した尺度の妥当性を基準関連妥当性から検討した。基準関連妥当性では、部活動・サークル適応感尺度と総括的適応感、価値観からの相関係数を算出して求めた。その結果、活動への積極性は総括的適応感($r=.62, p<.05$)と価値観($r=.48, p<.05$)との間に正の相関関係を示していた。不適応傾向は、総括的適応感($r=-.41, p<.05$)と価値観($r=-.17, p<.05$)との間に負の相関関係を有することが明らかにされた。組織・成員への満足は、総括的適応感($r=.68, p<.05$)と価値観($r=.39, p<.05$)との間に正の相関関係が確かめられた。これらの結果は、運動系と文化系に分類しても同様の傾向を示していた(表4)。総括的適応感は全ての下位尺度と有意な相関関係を示していた。総括的適応感は、部活動・サークルへの現在の適応状態を測定するため

表1 部活動・サークル適応感尺度の探索的因子分析結果

項目	因子負荷量		
	因子1	因子2	因子3
因子1: 活動への積極性			
部活動・サークルのない大学生生活は考えられない	.88	-.09	-.11
部活動・サークルは自分の生活にとってなくてはならない	.85	-.09	.00
辛い練習でも自分に役立ちそうであれば積極的に練習している	.52	.06	.22
誰よりも上手になろうと努力している	.50	.03	.23
部活動・サークルの時間がくるのが待ち遠しい	.48	-.19	.22
活動以外の時でも、今やっている部活動・サークルのことを考えることがよくある	.47	.04	.28
活動以外にも自分のできる目標を立てて練習している	.43	.05	.20
因子2: 不適応傾向			
厳しい練習についていけない	-.03	.74	.03
部活動・サークル(行っている内容、種目)は自分に向いていない	-.06	.66	-.03
自分の意志が弱く、部活動・サークルを辞めてしまおうと考えることがよくある	-.21	.66	.01
部活動・サークルに入っていることで、自分のやりたいことができなくて困っている	-.05	.66	.00
大学の勉強と両立することができなくなった	.23	.63	-.10
因子3: 組織・成員への満足			
自分の所属している部活動・サークルはまとまりがある	-.07	.03	.77
部活動・サークルでは部員みんなを信頼している	.11	.01	.67
私の部活動・サークルは、部員一人ひとりの意思を大切にしている	-.03	-.12	.65
部活動・サークルに入っていることで、人間的に成長する	.11	.02	.63
部活動・サークルの仲間に満足している	.08	-.13	.58
部活動・サークルの仲間は、私のことをわかってくれている	.20	-.05	.51
	因子間相関	因子1	—
		因子2	-.22
			.68
			-.36

表2 検証的因子分析結果

	GFI	CFI	RMSEA	AIC
全体の修正前	.900	.899	.078	1054.522
全体の修正後	.922	.925	.068	843.071
運動系	.913	.925	.069	—
文化系	.894	.903	.077	—

表3 尺度のα係数

	活動への積極性	不適応傾向	組織・成員への満足
全体	.87	.81	.85
運動系	.88	.80	.86
文化系	.87	.82	.83

表4 尺度間の相関係数

		活動への積極性	不適応傾向	組織・成員への満足
全体	総括的適応感	.62	-.41	.68
	価値観	.49	-.17	.39
運動系	総括的適応感	.62	-.40	.69
	価値観	.52	-.15	.45
文化系	総括的適応感	.61	-.45	.67
	価値観	.42	-.20	.30

全て5%水準で有意

表5 運動系と文化系における下位尺度得点の分析結果

	運動系		文化系		t	d
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
活動への積極性	21.00	4.23	20.30	4.30	2.56*	.16
不適応傾向	9.23	2.72	8.84	2.74	2.23*	.14
組織・成員への満足	19.19	2.93	18.68	3.01	2.68*	.17

*p<.05

表6 部活動・サークル適応感に活動時間と活動頻度が及ぼす影響

		活動頻度(β)	活動時間(β)	決定係数(R^2)
全体	活動への積極性	.25*	.14*	.09
	不適応傾向	.04	-.03	.02
	組織・成員への満足	.18*	.12*	.05
運動系	活動への積極性	.28*	.09*	.08
	不適応傾向	.05	-.03	.03
	組織・成員への満足	.21*	.08*	.05
文化系	活動への積極性	.18*	.20*	.09
	不適応傾向	-.01	-.07	.05
	組織・成員への満足	.10	.15*	.04

β =標準化偏回帰係数 * $p < .05$

のものである。そのため、現在、部活動・サークルに
適応していることは、活動への積極性と組織・成員へ
の満足との間に正の関係を有していることが考えられ
る。また、部活動・サークルに適応していることは、
不適応傾向との間に負の関係を有していることが推察
される。したがって、総括的適応感が本尺度の下位尺
度と有意な相関関係を示したことは妥当な結果と考え
られる。一方で、価値観と不適応傾向は $r = -.20$ 以下の
値を示しており、活動への積極性と組織・成員への満
足に比べて低い値であった。部活動の不適応には、専
制的集団雰囲気や自発性の障害が影響することが報告
されている¹⁸⁾。つまり、部活動・サークルに対する価
値観を有していたとしても、所属先が有する雰囲気と
いったが障害要因が影響してしまうため、そこでの不
適応傾向が高まってしまう可能性が考えられる。この
ことから、本尺度の基準関連妥当性は概ね満足のでき
る値を示していたため、本尺度は一定の妥当性を有す
ることが考えられる。

運動系と文化系における適応感の違いについて検討
するために、 t 検定を行った。その結果、運動系は文化
系よりの活動への積極性 ($t=2.56, p=.011$)、不適応傾向
($t=2.23, p=.023$)と、組織・成員への満足 ($t=2.68, p=.007$)
の得点が有意に高いことが示された(表5)。しかしな
がら、これらの効果量は $d=.17$ 以下を示しており、『小
の基準』である.20を下回っていた¹⁷⁾。このことから、
運動系と文化系において部活動・サークル適応感での
違いは、統計的に有意であったがその影響は小さいこ
とが推察される。

部活動・サークル適応感に対して活動頻度と活動時
間及ぼす影響について、重回帰分析を行った。その

結果、全体と運動系、文化系において活動頻度と活動
時間が活動への積極性に対して正の影響を及ぼしてい
た。全体と運動系において、活動頻度と活動時間が組
織・成員に正の影響を示していた。文化系において、
活動時間が組織・成員への満足に正の影響を及ぼして
いた。一方で、全体と運動系、文化系において、活動
頻度と活動時間が不適応傾向に及ぼす有意な影響は確
かめられなかった。また、活動への積極性と組織・成
員への満足に対して、活動頻度や活動時間は有意な影
響を示していたが、この時の決定係数は『小の基準』
にあたり¹⁷⁾、その説明力は小さいものと考えられる。
土屋ほか¹⁹⁾は、大学運動選手において部員からのサポ
ート期待度と指導者からのサポート期待度が指導者
に対する心理的接近度を介して部活動適応感を高めるこ
とを報告している。このように、部活動・サークル適
応感に対して、所属先での活動の量はあまり影響を有
することはなく、そこでの活動を通して得る経験が影
響している可能性が推察される。今後は、部活動・サ
ークル適応感に及ぼす要因について探索的に検討して
いく必要がある。

まとめ

本研究は、運動系と文化系の部活動・サークル適
応感を測定するための尺度を開発し、活動時間と活動頻
度が部活動・サークル適応感に及ぼす影響について検
討することを目的とした。その結果、部活動・サーク
ル適応感は、活動への積極性、不適応傾向、組織・成
員への満足の3因子から構成されることが確かめられ
た。この尺度の信頼性と妥当性を検討した結果、概ね
満足のできる値を示していた。次に、活動時間と活動

頻度が部活動・サークル適応感に及ぼす影響について検討した。その結果、活動時間と活動頻度は、部活動・サークル適応感に有意な影響を及ぼしていたが、その決定係数は低い値を示していた。今後は、様々な要因から部活動・サークル適応感に及ぼす影響について検討していく必要が考えられる。

引用文献

- 1) 須崎康臣・杉山佳生 (2016) 大学生における学校適応感と部活動・サークル所属との関連. 九州スポーツ心理学会第 29 回大会, 84-85.
- 2) 角谷詩織・無藤隆 (2001) 部活動継続者にとっての中学部活動の意義: 充実感・学校生活への満足度とのかかわりにおいて. 心理学研究, 72(2): 79-86.
- 3) 渡辺弥生・大重啓 (2010) 中学生の部活動における顧問のリーダーシップが学校適応に及ぼす影響について. 法政大学文学部紀要, 62: 95-112.
- 4) 青木邦男 (2003) 高校運動部員のスポーツ観とそれに関連する要因. 体育学研究, 48 (2): 207-223.
- 5) ベネッセ教育総合研究所 (2012) 第 2 章大学生活について—第 3 節先生と友人との関係. 第 2 回大学生の学習・生活実態調査報告書: 60-69. <http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/2012/hon/pdf/data_12.pdf>
- 6) 高木浩人 (2006) 大学生の組織帰属意識と充実感の関係. 愛知学院大学心身科学部紀要, 2(増刊号): 61-67.
- 7) 村松宏馬・日下部典子 (2014) 部活動適応感が学校適応感に及ぼす影響. 福山大学こころの健康相談室紀要, 8: 83-91.
- 8) 桂和仁・中込四郎 (1990) 運動部活動における適応感を規定する要因. 体育学研究, 35 (2): 173-185.
- 9) 青木邦男・松本耕二 (1997) 高校運動部員の部活動適応感に関連する心理社会的要因, 42: 215-232.
- 10) 雨宮怜・上野雄己・清水安夫 (2013) 大学生運動部員版部活動適応感尺度の開発—部活動内対人交流場面におけるソーシャルスキルとの関連性の検討—. 学校メンタルヘルス, 16(2): 170-181.
- 11) 吉村斉 (2005) 部活動への適応感に対する部員の対人行動と主将のリーダーシップの関係. 教育心理学研究, 53: 151-161.
- 12) 越良子・関澤敬子 (2010) 中学校文化系部活動におけるソーシャル・サポートと適応感との関連. 上越教育大学研究紀要, 29: 67-73.
- 13) 佐川馨 (2008) 音楽系部活動に所属する高校生の部活動適応感測定尺度作成の試み. 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 30: 53-63.
- 14) 中須賀巧・阪田俊輔・杉山佳生 (2016) 運動継続のための大学運動部活動における動機づけ分に気, 自己開示, 満足感の関係. スポーツパフォーマンス研究, 8: 1-13.
- 15) 岡田有司 (2009) 部活動への参加が中学生の学校への心理社会的適応に与える影響: 部活動のタイプ・積極性に注目して. 教育心理学研究, 57 (4): 419-431.
- 16) 岡田有司 (2012) 学校生活の諸領域に対する適応と重要度認知の因果関係: 交差遅延効果モデルによる検討. パーソナリティ研究, 21 (2): 186-189.
- 17) 水本篤・竹内理 (2008) 研究論文における効果量の報告のために—基礎的概念と注意点—. 英語教育研究, 31: 57-66.
- 18) 高田知恵子・田村宏・石淵真理子・藤永隆・下山定利・柚木仁・黒梅恭芳・丹野義彦 (1987) 部活動体験による青年期不適応について—事例検討—. 群馬大学医療技術短期大学部紀要, 8: 37-45.
- 19) 土屋裕睦・桂和仁・中込四郎 (1995) ソーシャル・サポートが大学運動選手の運動部活動に対する適応感形成に与える影響. 筑波大学体育科学系紀要, 18: 75-83.